

Title	フランス語版『資本論』第一巻第三章第二節「流通手段」の研究：ドイツ語本文との比較対照：遺稿
Sub Title	The study of the French version of Das Kapital, vol. 1, chap. 3, sect. 2 : the measure of circulation, as compared with the German original
Author	遊部, 久蔵
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.5 (1978. 10) ,p.629(1)- 647(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19781001-0001
Abstract	
Notes	遊部久蔵教授追悼特集号 遺稿
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遺稿

フランス語版『資本論』第一卷第三章 第二節「流通手段」の研究*

— ドイツ語本文との比較対照 —

遊 部 久 蔵

本稿は、さきに発表した「フランス語版『資本論』第一卷第一章『商品』の研究」(本誌64巻2・3合併号, 昭和46年2月。拙著『商品論の構造』青木書店, 昭和48年所収), 「フランス語版『資本論』第一卷第二章『交換過程』の研究」(本誌66巻12号, 昭和48年12月), および「フランス語版『資本論』第一卷第三章第一節『価値の尺度』の研究」(本誌68巻1・2号, 昭和50年1・2月)の続稿である。ここで対象とされるテキストは、前回の研究でのそれと同じであるが、再び一覧表として以下に示しておく。

1. ロワ訳(ラジャートル版)とよばれ、ここで対照とされているフランス語版。Le Capital par Kare Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur. [Livre premier] Paris, Editeurs Lachâtre, 1872-1875. (記号Fでこれを示す)。

2. 現行版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, in: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 23, Berlin, Dietz Verlag, 1962. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』第23巻, 大月書店, 昭和40年(記号Dでこれを示す)。この著作集は以下 Werke と記す。その巻数と訳本のそれとは同一。

3. 初版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1867.

4. 第2版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, zweite verbesserte Auflage, Hamburg, Verlag von Otto Meissner, 1872-1873.

5. カウツキー版。K. Marx: Das Kapital, Bd. 1, Volksausgabe, herausgegeben von Karl Kautsky, Stuttgart, J. H. W. Dietz, 1914.

6. 英訳。K. Marx: Capital, Vol. 1, translated by Samuel Moore and Edward Aveling and edited by Frederick Engels, Moscow, Foreign Languages Publishing House, 1961.

7. Gallimard 版。K. Marx: Le Capital, livre premier. Traduction par Joseph Roy, revue par Maximilien Rubel, en: Karl Marx Œuvres, Économie, tome 1 (Bibliothèque de la Pléiade), Paris. Éditions Gallimard, 1965.

* ここに掲げるのは、遊部久蔵教授の文字通り遺稿であり絶筆である。教授はこれを本誌に「研究ノート」として寄せられたのであるが、教授最晩年のご研究を偲ぶ意味から、巻頭に掲載させていただく次第である。教授はフランス語版『資本論』の検討を経て、貨幣論に再びとり組まれるご計画であった。(飯田裕康)

8. Éditions Sociales版。K. Marx : Le Capital, livre premier. Traduction de Joeph Roy, entièrement révisée par l'auteur. tome 1, Paris, Éditions Sociales, 1969.
9. Garnier-Flammarion版。K. Marx : Le Capital, livre premier. Traduction de J. Roy, Chronologie et avertissement par Louis Althusser, Paris Garnier-Flammarion, 1969.
10. 『経済学批判』。K. Marx : Zur Kritik der politischen Ökonomie (1859), in : Werke, Bd. 13, 1961. 杉本俊朗訳, 国民文庫, 大月書店, 昭和41年。

なお引用文中の原文でイタリック, ゲシュペルトの部分には傍点を付した。引用文中の〔 〕内の文章は, 私の文章である。

対照のさいの記号の意味を後出の項目1のそれについて例示する。

D. S. 118. ④. Z. 1-4. 訳. P. 138. —上記の文献リスト中の2のS. 118. 第4パラグラフ。1行目—4行目。同訳. P. 138.

F. P. 43. II. ④. L. 1-8. —上記の文献リスト中の1のP. 43. 右欄〔左欄はIで示す。〕第パラグラフ。1行目—8行目。

a 商品の変態

1. D. S. 118. ④. Z. 1-4. 訳. P. 138.

「すでにみたように, 諸商品の交換過程は, 矛盾した互いに排除しあう諸関係を含んでいる。〔初版(S. 63) —含んでいた。〕商品の発展(初版—私たちがいま考察した商品の発展)は, これらの矛盾を止揚しはしないが, [それは—初版]これらの矛盾がその中で運動しうる形態〔形態—初版〕をつくり出す。」

F. P. 43. II. ④. L. 1-8.

「すでにみたように, 諸商品の交換は, 互いに矛盾した, 排除しあう諸条件を満たすことなしには実現されえない。商品を使用価値と交換価値という二面的な物として現われしめる交換の発展は, これらの矛盾を消滅させるのではなくて, これらの矛盾がその中で運動しうる形態を創造する。」

(付注) カウツキー版はロワ訳の訂正を一部分とりいれている。

曰く。「すでにみたように, 諸商品の交換過程は, 矛盾した互いに排除しあう諸関係を含んでいる。使用価値および交換価値としての商品の二重性格を現象させ, 普通の諸商品と貨幣商品とへの諸商品の分離をひきおこすこの過程の発展は, これらの矛盾を止揚しはしないが, しかしこれらの矛盾がその中で運動しうる形態を創造する。」(S. 64-65)

2. D. S. 119. ②. Z. 6-9. 訳. P. 138.

「ここで私たちが関心をもつのは, 後者〔商品交換の局面〕のみである。したがって, 私たちは

全過程〔社会的物質代謝過程としての交換過程全体〕を形態の側面から、したがってただ社会的物質代謝を媒介する諸商品の形態変換または変態だけを考察しなければならない。(傍点部分は初版でゲシュペルト。以下同じ。)

F. P. 43. II. ⑤. L. 9—12.

「しかしながら、この物質的循環 (circulation matérielle) は、商品の一系列の形態変化あるいは変態によってのみ実現されるのであるが、この後者を私たちはいまや研究しなければならないのである。」

3. D. S. 119. ③. 訳. PP. 138—9.

「この形態変換〔貨幣の諸機能、それらから発生する・貨幣がそのさまざまな諸機能から汲取るさまざまな諸形態規定性——初版〕の理解がまったく不十分なのは、価値概念そのものが明らかになっていないことを別とすれば、ある一つの商品の形態変換は、つねに二つの商品の、普通の〔初版 (S. 63) に「普通の」なし。〕商品と貨幣商品との交換において行なわれる〔現われる——初版〕という事情のせいである。商品と金と〔Ware mit Gold——初版は mit = und〕の交換というこの素材的な契機だけを固執するならば、見るべきもの、すなわち形態に関して起きるものをまさに見落とすことになる。金はただの商品にしては貨幣ではないということ、そして他の諸商品は、それらの価格において、それら自身の貨幣姿態にしての金に自分自身を関係させるということを見落とすのである。〔「金は……」以下が初版ではつぎの通りである。「貨幣としての金の規定はすでに、単なる商品としてのそれには属しない形態規定であるということ、他の諸商品は、それらの価格において、それら自身の貨幣姿態としての金に自分自身を関係させるということ、また金がその一方で一般的な直接的な等価形態を受取るのは、諸商品が総じて自身に一般的な相対的価値形態を与えなければならないからにすぎないということを見落とすのである。〕 (S. 63—64.)」

F. P. 43. II. ⑥.

「この運動の形態学的側面は把握がいささか困難である。なぜなら一商品の形態の全変化は二つの商品の交換によってのみ行なわれるからである。たとえば、一商品は、その貨幣形態をまとうためにその有形的形態をはぎとる。それはいかにして起るか？ その金との交換によつて。二つの商品の単純な交換、それはわかりきった事実である。しかしそれをより詳細に考察しなければならない。」

4. D. S. 119. ④. P. 139.

「諸商品はさしあたりは金めっきもされず、砂糖もかけられないで、ありのままの姿で、交換過程にはいる。交換過程は商品と貨幣とへの商品の二重化〔eine Verdopplung. 初版 (S. 4), 第2版 (S. 83) は eine のかわりに die〕、すなわち諸商品がその使用価値と価値〔交換価値——初版〕との内的な対立をそこに表わすところの外的な対立〔einen äußeren Gegensatz, 初版では ein

äusserer Gegensatz とある。)を生みだす。この対立では、使用価値としての諸商品が交換価値としての貨幣に相對する。他方、この対立のどちら側も諸商品であり、したがって使用価値と価値との統一体である。しかし、この相異なるものの統一は、兩極のそれぞれにおいて逆に現われ、そのことによって同時に兩極の相互關係を表わしている。商品は実在的には使用価値であり、その価値存在〔Wertsein。初版では Wertdasein (価値定在)〕は價格においてただ觀念的に現われているだけである。そして、この價格が商品をその実在の価値姿態にしての對立する金に關係させている。逆に、金材料はただ価値体化物、貨幣〔Wertmateriat, Geld。初版に中間のカンマなし。〕として意義をもっているだけである。それゆえ、金材料は実在的には交換価値〔Tauschwert。初版では allgemeines Äquivalent, Tauschwert (一般的等価物, 交換価値)〕である。その使用価値は、その実在の使用姿態の範圍としての對立する諸商品にそれが關係する相對的諸価値表現の系列において、やっとな觀念的に現われているだけである。このような、諸商品の對立的な諸形態が、諸商品の交換過程が現實的諸運動形態である。」

F. P. 43. II. ⑦—44. I. ①.

「金は一つの極を占め、すべての有用品は反對の極を占める。兩側に商品、使用価値と交換価値との統一がある。しかしこの對立物の統一は二つの極において逆に現れる。商品の有形的形態は実在的形態であるが、一方商品の交換価値はその價格によって觀念的に、想像的金でのみ表わされる。反對に金の自然的、金屬的〔Gallimard 版 (p. 643) のみ métallique の次にコンマがある。以下諸仏訳本間におけるコンマの存在の相異について言及しない。〕形態は、その一般的交換可能性の形態であり、価値形態であり、一方、その使用価値はその等価として現れる一列の諸商品において觀念的にしか表わされない。さて、一商品が金と交換されるならば、それは同時にその有形的形態を価値形態に変える。金が一商品と交換されるならば、それは同じくその価値姿態を有形的形態に変える。」

(付注) カウツキー版では、現行版の「交換過程は、……使用価値と価値との統一体である。」がつぎのようになっている。「この過程において、私たちは、一方の側に金、他方の側に他のすべての有用物を見出す。私たちは 兩方の側に 諸商品、使用価値と交換価値との統一物を見出す。」(S. 65)

なお現行版のこの章句の『経済学批判』の本文との關係については、荒木勉夫著『「経済学批判」と「資本論」』新評論、1974, pp. 213-215 参照。

5. D. S. 120. ④と⑤ との間(訳文では、p. 140の最後のパラグラフとp. 141の最初のパラグラフとの間)に、つぎの文章がフランス語版(F. P. 44 II ②)でははいる。

「私たちは、いまや、商品が通過しなければならぬ二つの継続的變態の各々の側を検討しなければならぬであろう。」

6. D. 120. Fußnote. 65. Z. 3—4.

「この個所へのラサールの注は、誤って、貨幣を単なる価値章標だと説明している。」

F. P. 44. I, note, 1, には欠けている。なおロワ訳文では、このラサール引用のヘラクレイトスの言葉はフランス語訳文に先立ちギリシャ語でしるされている。

(付注) 初版 (S. 65), 第2版 (S. 84) ではヘラクレイトスの言葉はギリシャ語。カウツキー版でのヘラクレイトス独訳文はやや異なる。Éditions Sociales 版では、マルクスの上文が編注 (P. 114) で付されており、Gallimard 版では、ギリシャ文を注からのぞき、編注 (P. 644. note 1 [P. 1641]) で同じくマルクスの上文を付してから曰く。「エンゲルス宛書翰 (1878. 11. 28) でマルクスは、ラサールの見解を皮肉にも引用し、註釈している。」さらに『経済学批判』Gallimard 版訳文(「流通手段および貨幣についての諸理論」中の貨幣数量説に関する部分 [Kritik. S. 135. 訳. P. 210])への編注 (P. 422. 編注1 [P. 1616])——そこでは「ラサールにとって、ヘラクレイトスは貨幣についての断片で貨幣材料における近代の理論的発見、とくにリカードを予想したとのべられ、エンゲルス宛マルクスの書翰 (1859. 2. 25. [Werke, Bd. 29. S. 402-405, 訳. PP. 312-316]) が指示されている。——の参照を求めている。

7. D. S. 121. ①. Z. 23—24. 訳. PP. 141—142.

「貰った馬の口の中のをのぞきこむものではない。〔貰い物には文句をいわないという諺——引用者〕だがかれ [aber er = カウツキー版 (S. 67) doch der Weber] は贈物をするために市場を歩くのではない。」

F. P. 44. II. ⑤には欠けている。

(付注) この文節を含むパラグラフについての『経済学批判』の本文との比較——荒木前掲著, PP. 232—240 参照。

8. D. S. 122. Z. 9—12. 訳.

「そして、事実上、各個のエレの価値はたしかにまたただ同種の人間的労働の社会的に規定された同じ量の体化物でしかないのである。」

F. P. 45. II. ②には欠けている。

(付注) この一文について同所の現行版の編注に曰く。「『資本論』のロシア訳者であるN. F. ダニエルソン宛、1878年11月28日付手紙のなかでマルクスはこの最後の文章をつぎのように変えている。『そして、事実上、各個のエレの価値は、たしかにまたエレの総量に支出された社会的労働量の一部の体化物でしかないのである。』 [Werke. Bd. 34, S. 362. 訳. P. 290.] これと同じ訂正は、『資本論』第1巻のドイツ語第2版のマルクスの自用文のなかにも見出されるが、しかしそれはかれの手で書かれたものではない。」Gallimard 版, P. 646 編注1 (P. 1641) に上記の訂正文が訳載されている。

9. D. S. 122. ②. Z. 2—5. 訳. P. 143.

「分業体制のうちにそのばらばらな諸環節 *seine membra disjecta* [*seine zerstückten Glieder* カウツキー版 (S. 68) 編者付記] を示している社会的生産有機体の量的な編成は、その質的な編成と同ように自然発生的で偶然的である。」

F. P. 45. I. ③. L. 3—8.

「そのばらばらな諸環節——*membra disjecta* [Gallimard 版 (P. 646) Éditions Sociales 版 (P. 116) ともイタリック] ——が分業から生まれる社会的生産有機体は、自然発生性と偶然性——ひとはその諸環節の機能自身あるいは諸環節の比例関係をそうみなしている。——の刻印をおびている。」

10. D. S. 122. ④. Z. 1—2. 訳. P. 143.

「一方の商品所有者にとっては金がかれの商品にとって代わり、他方の商品所有者にとっては商品がかれの金にとって代わる。」

F. P. 45. II. ⑤には欠けている。

11. D. S. 123. ②. 20 行目. 訳. P. 145. In. . . の前に F. P. 45. II. ③. L. 13—15 の次の一文が入る。

「この運動はそれら〔諸商品〕をすべて金に変えて、まさにこれによって金をそれらのもはや想像上ではなく実在上の変形された姿とする。」

12. D. S. 124. Fußnote 69. 訳. P. 145.

「前にのべたように、金銀の生産者は例外であって、かれは自分の生産物をあらかじめ売っているということなしに、それを交換して引渡すのである。」

F. P. 46. I. note 1.

「ここで、私たちがすでに指摘したように、金銀の生産者は例外をなしている。かれはあらかじめ買っているということなしに自分の生産物を売るのである。」

13. D. S. 125. ②. Z. 1—7. 訳. P. 147.

「そこで今度は、ある商品、たとえばリンネルの総変態を考察するならば、まず第一に目につくのは、それが二つの相対立する互いに補いあう運動、 $W-G$ と $G-W$ とから成っているということである。商品のこの二つの相対立する変態は、商品所有者の二つの相対立する社会的過程で行なわれ、商品所有者の二つの相対立する経済的役割に反射 [reflektieren, カウツキー版 (S. 70) ではこれに *spiegeln* をカッコして付している。] される。販売の当事者 [Agent. カウツキー版ではこれに *Vollbringer* をカッコして付している。] としてかれは販売者になり、購買の当事者としてかれは購買者になる。」

F. P. 46. I. ⑥. L. 1—6.

「さて今度は全変態，M—A〔販売〕とA—M〔購買〕という二つの運動の全体を検討してみよう。それらは交換者の逆の二つの取引，販売と購買によっておこなわれ，それらは交換者に販売者と購買者という二重の役割の極印を押す。」

14. D. S. 125. ③. Z. 1—7. 訳. P. 147.

「一商品の総変態は，その最も単純な形態では，四つの極と三人の登場人物〔drei personal dramatis. カウツキー版ではここに drei handelnde Personen を付加。〕とを前提する。まず商品にその価値姿態〕Wert-Gestalt. 初版 (S. 71) ではゲシュペルト Gestalt (外化された姿)〕としての貨幣が相対するのであるが，この姿態は，向こう側で，他人のポケットのなかで，物象的な堅い実在性をもっている。こうして商品所有者に貨幣所有者が相対する。次に，商品が貨幣に転化するやいなや，その貨幣は商品の一時的な等価形態となり，この等価形態の使用価値または内容はこちら側で他の諸商品体のうちに実存する。」

F. P. 46. II. ②. L. 1—9.

「一商品の全変態は，その最も単純な形態において四つの項を前提する。商品と貨幣，商品所有者と貨幣所有者は，二度相対する二つの極点である。しかしながら交換者の一人はまずその販売者，商品の所有者という役割においてはいい，つぎにその購買者，貨幣の所有者という役割においてはいい。それゆえ三人の登場人物しかいないのである。」

15. D. S. 126. ①. Z. 3—7. 訳. PP. 147—148.

「もちろん，商品そのものはここでは対立的に規定されている。それは，その所有者にとって，出発点では非使用価値であり，終点では使用価値である。こうして，貨幣は，まず商品が転化する堅い価値結晶として現われるが，後には商品の単なる等価形態として消失する。〔もちろん，商品そのものはここでは対立的に規定されており，その所有者にとって，出発点では非使用価値であり，終点では使用価値であり，また貨幣はまず商品を堅い価値結晶として表示し，後には商品の単なる等価形態として消失する。——初版. S. 71.〕」

F. P. 46. II. ④. 全文。したがってロワ訳では改行されている。

「この循環は商品形態によって開始し，また終了する。出発点においては，商品形態はその所有者にとって非使用価値である生産物に結びつき，回帰点においてはかれにとって使用価値として役立つところの他の生産物に結びつく。なお貨幣がまたそこで二重の役割を演じるということを注目しよう。最初の変態においては，貨幣は他の場所に他人のポケットに固い鳴りひびく実在性を所有する商品価値の姿として商品の真向いにおかれる。商品が貨幣の蛹に変化した途端に貨幣は固い結晶体であることをやめる。貨幣はもはや商品の一時的形態であり，消えうせて使用価値にかわるはずの商品の等価形態であるにすぎない。」

16. D. 127. Fußnote 72. 訳. P. 149.

第2版への注。「このような現象は明白なのに、経済学者たち、たいていはこれを見落としている。」

F. P. 47には欠けている。

（付注） Gallimard 版, P. 652. 編注1 (P. 1641) および Éditions Sociales, P. 121. 編注1にこの脚注は記されている。

17. D. S. 127. ②. Z. 20—S. 128. ①. Z. 8. 訳. P. 150.

「流通は生産物交換の時間的、場所的、個人的制限を打破するのであるが、それは、まさに生産物交換のうち存する自分の労働生産物を交換して引き渡すことと他人の労働生産物を交換して受けとることとの直接的同一性を、流通が販売と購買との対立に分裂させるということによってである。対立して相対する諸過程が一つの内的な統一をなしているということは、同様にまた、これらの過程の内的な統一が外的な諸対立において運動するということの意味している。互いに補いあっているために内的には独立していないものの外的な独立化が、ある一定の点まで進めば、統一は一つの——恐慌によって暴力的に自己を貫徹する。使用価値と価値〔Wert. 初版 (S. 73) では Tauschwerth (交換価値)〕との、同時に直接的に社会的労働として現われなければならない私的労働の、同時にただ抽象的一般的労働としてのみ意義を有する特殊な具体的労働の、物象の人格化と人格の物象化との、商品に内在する対立——この内在的な矛盾は、商品変態の諸対立においてその発展した諸運動形態を受取るのである。」

F. P. 47. II. ②. L. 1—25.

ここで改行されている。

「流通は時間や空間や個人の個人に対する関係が生産物の物々交換をそれによって縮小する障害物を爆破させる。だがいかにしてか？ 物々交換での商業においては、人は、同時にもうひとりの人がかれの生産物を譲渡することなしには、自分の生産物を譲渡することができない。これら二つの行為の直接的一致を流通は販売と購買との対立物を導入して分割する。販売してのち、私は同じ場所で、同時に、私がある人へと販売した同一人から (de la même personne の de が Gallimard 版 [P. 653] ではàとある。) 購買することを余儀なくされない。購買は販売の不可避の補足物であるということは真実であるが、それにもかかわらず、それらの統一は正反対なものの統一であるということも真実である。もしも商品変態の互いに補足的な二つの段階の分離がながびくならば、もしも販売と購買との間の分裂が強化されるならば、それらの緊密な結合は一つの——恐慌によって〔Par une-crise. — Gallimard 版 (P. 653) では par une. . . crise. Éditions Sociales 版 (P. 122) では、—— par une crise. ともに次の文章との間の——がない。〕立証される。——使用価値と交換価値との、同時に社会的労働として現われなければならない私的労働の、抽象的労働としてのみ価値を有する具体的労働の、商品が内含する諸矛盾、これらの商品の本性に内在的な諸矛盾は、流通

においてその諸運動形態を獲得する。」

18. D. S. 128. ②. 訳. P. 151.

「商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能を受ける。」

F. P. 47. II. このパラグラフを欠いている。

b 貨幣の通流

19. D. S. 128. ③. Z. 1—6. 訳. P. 151.

「労働生産物の質料変換がそれによって行なわれる形態変換、 $W-G-W$ は、同じ価値が商品として過程の出発点をなし、商品として同じ点に復帰することを条件とする。それゆえこのような諸商品の運動は循環である。他方では、この同じ形態は貨幣の循環を排除する。その運動の結果は、貨幣が絶えずその出発点から遠ざかることであって、出発点に帰ってくることではない。」

F. P. 47. II. ③. L. 1—7.

「 $M-A-M$ 〔商品—貨幣—商品〕という運動、あるいは一商品の全変態は、同一の価値が形態変化を蒙ってのち、その最初の形態、商品形態に復帰するというこの意味で血液循環的である。価値の形態、貨幣は、反対にその流通の経過が終るやいなや消え去る。」

20. D. S. 129. ②. Z. 13—S. 130. ①. Z. 9. 訳. P. 152.

「商品はその流通の前半で貨幣と席を取り替える。それと同時に商品の使用姿態は流通から消費へと脱落する。〔脚注 74 の指示がここに付されている。〕商品の価値姿態または貨幣仮面が商品にとってかわる。流通の後半を商品もはやそれ自身の表皮をつけてではなく、その金の表皮をつけて通り抜ける。それとともに、運動の連続性〔Kontinuität. カウツキー版 (S. 75) ではカッコして *der ununterbrochene Fortgang* (中断しない持続) が付されている。〕はまったく貨幣の側にかかってくる。そして商品にとっては二つの対立した過程を含む同じ運動が、貨幣の固有の運動としては、つねに同じ過程を、貨幣とつねに別な商品との場所変換を含んでいるのである。それゆえ、商品流通の結果、すなわち別の商品による商品の取り替えは、商品自身の形態変換によってではなく、流通手段としての貨幣の機能によって媒介されるように見え、この流通手段としての貨幣が、即且対自的には運動しない商品を流通させ、商品をそれが非使用価値であるところの手から、それが使用価値であるところの手へと、つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に移して行くのである。貨幣は絶えず商品に代わって流通場所を占め、それとともに自分自身の出発点から遠ざかってゆくことになって、諸商品を絶えず流通部面から遠ざけてゆく。」

F. P. 48. I. ③. L. 9—20.

「商品がその流通のこの補足的運動を開始する時、商品はすでにその自然的肉体を脱してその金

の幼虫を帯びたのである。こうして運動の連続性は貨幣の側にも落ちてくる。自分自身では不動の諸商品を流通せしめ、それらをそれらが非使用価値である手からそれらが使用価値である手につねにその自分自身の方向とは反対の方向に移転させるるようみえるのは、貨幣である。貨幣はたえず商品の場所に身を置き、また自分自身の場所を放棄することによって、商品をたえず流通の領域から遠ざける。]

21. D. S. 129. Fußnote 74. 訳. P. 152.

「商品が繰り返し販売される場合にも——それはここではまだ私たちにとって存在しない現象であるが——最後の決定的販売によって商品は流通の部面から消費の部面に脱落して、ここでは生活手段または生産手段として役立つのである。」

F. P. 48 にはこの脚注は欠けている。

(付注) Gallimard 版 (P. 655) Éditions Sociales 版 (P. 123) Garnier-Feammarion 版 (P. 98) とともにこの注はないが、この注がフランス語版で欠如している理由は、いうまでもなくこの注が付されている本文(項目20参照)が変化したからである。

22. D. S. 130. ③. Z. 8—9. 訳. P. 153.

「ところで、すべてこれらのことは、ただここで考察された単純商品流通の形態にあてはまるだけであるということは、まったく自明である。」

F. P. 48, II. note 1.

上文は本文ではなく上記の注へおくりこまれている。そこに曰く。「本文であたえられた展開は、私たちが現在研究している唯一の形態である単純流通の形態にのみ関係があるということを十分に注意しなければならない。」

23. D. S. 131. ②. Z. 1—9. 訳. P. 154.

「一国では毎日多数の同時的な、したがってまた空間的に並行する一面的な商品変態が、換言すれば、一方の側からの単なる販売、他方の側からの単なる購買が行なわれている。〔初版 (S. 77) ではつぎのとおり。「一国では毎日おどろくべき数の一面的な商品変態が、すなわち互いに独立した商品所有者たちが行なう数えきれないほど多数の分裂した諸販売が同時に、したがって空間的に相並んで行なわれている。〕諸商品は、その諸価格においてすでに一定の表象された諸貨幣量〔Geldquantis. カウツキー版〔S. 76〕=Geldmenge〕に等置されている。ところで、ここで考察されている直接的流通形態は、商品と貨幣とを、一方を販売の極に、他方を購買の対極において、おたがいに肉体的に対立させるのだから、商品世界の流通過程のために必要な流通手段の量は、すでに諸商品の価格総額によって規定されている。」

F. P. 48. II. ④. L. 1—9.

「一国において毎日同時にまた相並んで多かれ少なかれ無数の販売が、またはさまざまの諸商品

の部分的変態がおこなわれる。これらの諸商品の価値がそれらの諸価格によって、換言すれば想像された金の総額によって表わされている。それゆえ市場に提供されたすべての諸商品の流通が必要とする貨幣量は、それらの諸価格の総額によって規定されている。」

24. D. S. 131. ②. Z. 21—29. 訳. P. 154.

「これとまったく同じ現象は、たとえば、金の価値が下がるのではなく、銀が価値尺度としての金にとって代わる場合とか、銀の価値が上がるのではなく、金が銀を価値尺度の機能から追い出すような場合にも起きるであろう。前の場合には以前の金よりも多くの銀が、あとの場合には以前の銀よりも少ない金が流通しなければならないであろう。どちらの場合にも、まず貨幣材料の価値、すなわち諸価値の尺度として機能する商品の価値が変動し、そのために諸商品価値の価格表現が変動し、またそのためにこれらの価格の〔dieser Preise. カウツキー版 (S. 76) = der Preise〕実現に役立つ流通する貨幣の量が変動したであろう。」

F. P. 48. II. ④. L. 31行目以下に上のドイツ語版の文章なく、しかもここ („Man hat geslhn…“) で改行されている。

(付注) カウツキー版でもロフ訳と同じくここで改行されている。Gallimard版、本文P. 657. の編注 1 (PP. 1641-1642) では、この削除文章が補足されている。

25. D. S. 131. ②. Z. 33—S. 132. ①. Z. 4. 訳. P. 155.

「いま、たとえば価値尺度そのものの価値が下がるとすれば、それはまず貴金属の産源地で商品としての貴金属と直接に交換される諸商品の価格変動に現われる。ことに、市民社会の比較的未発展な状態では、ほかの商品の一大部分は、なおかなり長いあいだ、価値尺度のいまでは幻想的となり古くなった価値で評価されるであろう。」

F. P. 49. I. ①. L. 4—12.

「いま、金の固有価値が変化する、つまり低下するとすれば、それはまず貴金属が他の諸商品にたいして交換される貴金属の産源でみとめられるであろう。それらの諸商品の価格は騰貴するが、他の多数の諸商品は、金属貨幣の過ぎ去った、幻想的となった価値で引きつづき評価されている。この事態は、一般的市場の発展の程度に応じて多かれ少なかれ長期間接続しうる。」

(付注) なおこの独文での *bürgerliche Gesellschaft* の訳語について河上肇博士と宮川実氏共訳『資本論』でのつぎの記述を参照。そこではこの語は「商品交換社会」と訳されている。

「この『商品交換社会』は、*bürgerliche Gesellschaft* の訳語である。エンゲルス校訂の英訳本には之を *civil society* (市民社会) となし〔英訳 P. 118.〕、マルクス自身の校閲した仏訳本には *marché universel* (一般市場) としてある。これを一概にブルジョア社会と訳出するときは、資本家的社会を意味する如く見え、場所によっては不適當であるがため、——資本論における此の段階では勿論のことだが、更に他の著作においては、例えば『ドイツ・イデオロギー』(Marx

Engels Archiv, Bd. 1, S. 259.)における此の語の用例を見よ、——吾々は場所に応じて之が訳語を二三にした。」(河上肇・宮川実共訳『資本論』第1巻上冊, 改造社版, 1931, p. 252) もともとマルクスの市民社会観には広狭二義があるようである。(拙著『マルクス経済学』春秋社, 1968, pp. 50-52参照)この項目での独仏文に照らして、ここでの市民社会が広義のものであることはあきらかであろう。その意味で向坂氏の burgerliche Gesellschaft のこの訳語, 「ブルジョア社会」(第1巻, 岩波書店, 1967, p. 153) は不適當であろう。

26. D. S. 133. ①. Z. 12—19. 訳. PP. 156—157.

「このような同じ貨幣片が繰り返す場所変換は、商品の二重の形態変換、二つの相対立する流通段階を通しての商品の運動を表わしており、またいろいろな商品の変態の絡み合いを表わしている(脚注76)。この過程が経過する対立して互いに補いあう諸段階は、空間的に並存することはできないのであって、ただ時間的にあいついで継起できるだけである。それだから、時間区分がこの過程の持続時間の尺度になるのであり、また与えられた時間内の同じ貨幣片の通流回数が貨幣通流の速度を度量するのである。」

F. P. 49. II. ②. L. 1—11.

フランス語訳ではここで改行となり、つぎのようにつづく。

「2ポンドスターリングの4回くりかえされる位置変換は、蒸溜酒の最初の変態によっておわる小麦、リンネル、バイブルのおたがいを絡み合わせる全変態の結果として生じる(脚注1)。このような一つの系列が形成されるお互いに対立し補足しあう諸運動は、継続的にで同時的にでなく行なわれる。多かれ少なかれの時間がそれら諸運動にとって行なわれるためには必要である。それゆえ貨幣通流の速度は、あたえられた時間内の同一貨幣片の回転数によって測られる。」

27. D. S. 133. ①. Z. 23—26. 訳. P. 157.

「すなわち、流通過程のある与えられた期間については、

$$\frac{\text{諸商品の価格総額}}{\text{同一名称の貨幣片その通流回数}} = \text{流通手段として機能する貨幣の量}$$

となる。」(カウツキー版[S. 78]では上の式が文章化されている。)

(左辺の分数の分母の「同一名称の」gleichnamiger Geldstücke が初版[S. 80]では「一貨幣片の」eines Geldstücks)。

F. P. 49. II. ③.

「与えられた期間における同一名称の貨幣片の回転数で諸商品の価格総額で割ったもの=流通用具として機能する貨幣の総量。」

(付注) この項目は、——林直道氏ものべるように(『フランス語版資本論の研究』, 大月書店, 昭和50年, p. 132) ——両版に実質的相違はなく表現上の相違にとどまる。ちなみに同氏が同著, 第

2部II「理論的叙述の変更と補足」中の流通手段に関する部分で指示されているのは、この項目のみである。

28. D. S. 133. ①. Z. 34—S. 134. ①. Z. 2. 訳. P. 157.

「とはいえ、流通しつつあるすべての同一名称の貨幣片の総通流回数が、各個の貨幣片の平均通流回数または貨幣通流の平均速度を生じる。」

F. P. 49. II. ④. L. 10—16.

「それゆえ流通する貨幣の総額がそれで成立つ個々の諸片は、非常にさまざまな活動の程度に応じて機能するが、各々の名称の諸片の総体は一定期間の間に価格のある総額を実現する。それゆえ貨幣の通流の中位の速度が確立される。」(ここで改行)

29. D. S. 134. ②. Z. 1—6. 訳. P. 158.

「貨幣通流では一般にただ諸商品の流通過程、すなわち反対の諸変態を通じての諸商品の循環〔「すなわち」以下ここまで初版(S. 81)にない。〕が現われるだけであると同様に、貨幣通流の速さに現われるものも、諸商品の形態変換の速さ、諸変態系列の連続的なからみ合い、物質代謝の速さ、流通過程からの諸商品の急速な消失および新たな諸商品による同じく急速な補填である。」

F. P. 50. I. ②. L. 1—9.

「貨幣の通流が一般に諸商品の流通からその推進力と方向とを受けると同様に、貨幣運動の速さは、諸商品形態変化の速さ、変態系列相互の連続的再開、諸商品の流通からの突然の消滅および新たな諸商品によって同様に受けるその補充のみを反映する。」

(付注) ロワ訳文中の、「変態系列相互の連続的再開」(la rentrée continuelle des séries de métamorphoses les une dans les autres) が Gallimard 版では「変態系列の連続的絡み合い」(l'entrelacement continu des séries de métamorphoses) とある。(p. 660)

30. D. S. 135. ①. Z. 1—6. 訳. P. 159.

「したがって、それぞれの期間に流通手段として機能する貨幣の総量は、一方では、流通する商品世界の価格総額によって、他方では、商品世界の対立的な諸流通過程の流れの緩急によって規定されているのである。かの価格総額の幾分の一が同じ貨幣片によって実現されうるかは、この流れの緩急に依存するのである。」

F. P. 50. II. ①. L. 1—6.

「それゆえあたえられた期間に流通手段として機能する貨幣の総量は、流通するすべての諸商品の価格の総額によって、他方では、それらの変態の相対的速度によって規定されている。」(・傍点部分はフランス語版でイタリック。Éditions Sociales 版では、そのほか、○傍点部分もイタリック。)

c 鑄貨 価値章標

31. D. S. 138. ②. Z. 2—4. 訳. P. 161.

「諸商品の諸価格または諸貨幣名称において表象されている金の重量部分は、流通のなかでは同名の金片または鑄貨として諸商品に相對しなければならぬ。」

F. P. 51. II. ②. L. 4—8.

「たとえば、公定標準に従って諸商品の諸価格あるいは貨幣名称において表わされる金の重量は、市場で同名の金の正金または鑄貨として諸商品に相對しなければならぬ。」

(付注) この項目は現行版の「表象されている」(„vargestellte“) という部分がロワ訳では「公定標準に従って……表わされる」(exprimés selon l'étalon officiel) とある以外、著しい相違はみとめられないが、「表象されている金」ということで、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの見解をとかく主観的意味に解する見解にたいする批判の一典拠としてここにとりあげたのである。

32. D. S. 139. ②. Z. 5. 訳. P. 164.

「金の称号と金の実体とが……」の一文の前につぎの一文がロワ訳でははいつている。

F. P. 52. I. ①. L. 4—7.

「たとえば1ギニーがその流通中に歩む一步毎に、それはその名称を全然保持しながら、その重量のあるものを失うのである。」

33. D. S. 140. ②. Z. 4—5.

「金の鑄貨定在は完全にその価値実体から離れる。」

F. P. 52. II. ②. L. 1—5.

ここで改行がおこなわれてつぎのとおりである。

「けれども、それら〔銀や銅の章標〕が引続き金鑄貨の代理として機能するというのが重要な点である。それゆえその金属価値から完全に解放された金の鑄貨機能は、その流通の摩擦そのものによって生ぜしめられた一現象である。」

34. D. S. 141. ②. Z. 1—2. 訳. P. 166.

「それ〔強制通用力をもった国家紙幣〕は、直接に (unmittelbar) 金属流通から生まれる。」

F. P. 52. II. ③. L. 2—3.

「それ〔強制通用力をもった国家紙幣〕は、自然発生的に (spontanément) 金属流通から生まれる。」

(付注) 『経済学批判』では、「直接に」の語が使用されている。曰く。「強制通用力をもつ国家紙幣は、価値章標の完成された形態であり、金属流通または単純な商品流通そのものから直接に

(unmittelbar) 生じる紙幣の唯一の形態である。」(Kritik S. 95. 訳. P. 149.) なお「金属流通から直接に (unmittelbar) 生じる貨幣象徴……」にもある。(S. 93. 訳. P. 146.)

35. D. S. 141. ③→S. 142. ①. 全文. 訳. PP. 166—167.

「1ポンド・スターリング, 5ポンド・スターリングなどというような貨幣名称が印刷されている諸紙券が国家によって外部から流通過程へ投込まれている。それらが現実に同一名称の金の総額の代わりに流通するかぎり, その運動にはただ貨幣通流の諸法則そのものが反映するだけである。紙幣流通の独自の法則は, ただ金にたいする紙券の代表関係から生じうるだけである。この法則は, 簡単には, つぎのとおりである。すなわち紙幣の発行は, 紙幣によって象徴的に表わされる金 (または銀) が現実に流通しなければならないであろう量に制限されるべきであるということである。ところで, 流通部面が吸収しうる金量は, 一定の平均水準の上下に絶えず動揺している。とはいえ, 与えられた一国における流通手段の量は, 経験的に確認される一定の最小限より下には決して減じない。この最小量が絶えずその構成要素を取り替えるということ, すなわちつねに違った金片から成っているということは, もちろん, 流通部面におけるその大きさやその不斷の回転をなんら変えない。それだから, この最小量は紙製の象徴によって置きかえられることができるのである。これに反して, もし今日すべての流通水路がその貨幣吸収能力の最大限度まで紙幣で満たされてしまえば, これらの水路は, 商品流通の変動のために明日はあふれることがありうる。およそ限度というものなくなってしまうのである。しかし, 紙幣がその限度, すなわち流通しうるであろう同じ名称 [gleicher Denomination. カウツキー版 (S. 86) ではgleicher Benennung] の金鑄貨の量を越えても, それは一般的な信用崩壊の危険を度外視すれば, 商品世界のなかでは, やはり, この世界の内在的な諸法則によって規定されている金量, したがってまたちょうど代表されうるだけの金量を表示しているのである。紙券の量がたとえば1オンスずつの金の代わりに2オンスずつの金を表示するとすれば, 事実上, たとえば1ポンドは, すなわちほぼ $\frac{1}{4}$ オンスの金の代わりにほぼ $\frac{1}{8}$ オンスの金の貨幣名となる。[「事実上……」以下が初版 (S. 89) ではつぎの如くである。「事実上, その貨幣名称は, すなわち, ほぼ $\frac{1}{4}$ オンスについて1ポンドからほぼ $\frac{1}{8}$ オンスの名称に押し下げられる。」] 結果は, あたかも諸価格の尺度としての金の機能が変えられたと同一である。したがって, 以前は1ポンドという価格で表われるのと同じ諸価値が, いまでは2ポンドという価格で表われる。」

F. P. 52. II. ④—P. 53. I. ②. 全文.

「国家は, 1ポンドとか, 5ポンドなどの鑄貨名の記載されている紙券を流通に投げ込む。これらの紙券が実際に同一名称の金重量に代わって派通するかぎり, その運動は, 実在的貨幣の通流の法則を反映させるにすぎない。紙幣流通の独自の法則は, 金または銀の代理者というその役割にのみ基因しうるのであって, この法則は非常に簡単である。それはつぎのことに存する。すなわち紙

幣の発行は、紙幣がその象徴であり、また実際に流通しなければならないところの金(または銀)の量に比例しなければならないということである。流通が吸収しうる金量は、たしかに一定の中位の水準の上下に絶えず変動している。けれども、それは各国で経験が知らしめる最小限以下には決して下らない。この最小量が絶えずその構成部分を更新する、すなわち最小量に入ったり出たりする個々の铸貨が行ったり来たりするという事は、もちろん流通範囲におけるその比率や継続するその回転を変えない。それゆえこの最小量を紙の象徴で代理するということが妨げられないのである。もし逆に流通の水路が貴金属吸収能力の限度まで紙幣で一杯になるならば、諸商品価格におけるごく僅かな変動もその水路をあふれさせようであろう。その時からすべての限度が失われるのである。〔以下フランス語版のみ改行〕

一般的信用崩壊を度外視して、紙幣がその正当な比率を越えると仮定するとしよう。依然として紙幣は諸商品の流通において流通が諸商品の内在的法則にしたがって必要とし、その結果それだけが代理されうるだけの金量のみを代表するであろう。もしも、たとえば、紙幣の総量がそれがそうあるべきところのものの2倍であるならば、 $\frac{1}{4}$ オンスの金〔 $\frac{1}{4}$ once d'or. Gallimard 版(P. 669)はじめ他の3版本では $\frac{1}{4}$ d'once d'orとある。〕を代表した1ポンドの紙券がもはや $\frac{1}{8}$ [オンスの金]しか代表しないであろう。結果は、あたかも金はその価格の度量基準の機能において変更されたと同一である。]

(付注) 現行版、「紙券の量がたとえば1オンスずつの金の代わりに……」=ロワ訳、「もしも、たとえば、紙幣の総量が……」の個所は、紙幣減価(インフレーションの可能性の契機)のさいに価格の度量基準が低下するか否かに関連してしばしば引用される典拠である。(拙著『インフレーションの基礎理論』思潮書林、昭和22年、pp. 38-40)そこで参考までに英訳、ロシア語訳の当該個所をみると、つぎの如くである。

英訳——「もしも紙幣発行量がそれがあべき量の2倍であるならば、事実上、1ポンドは $\frac{1}{4}$ オンスの金ではなく $\frac{1}{8}$ オンスの金の貨幣名称であるであろう〔以下4行、現行版と同じ。〕」(P. 128)

ロシア語訳——「もしも、たとえば、紙幣の既知量が自分の名称にもとづいて2オンスの金を表示するが、実際上は1オンスの金の代理をするならば、事実上1ポンドはたとえば以前の $\frac{1}{4}$ オンスの金のかわりに $\frac{1}{8}$ オンスの金の貨幣名称となる。〔以下5行、現行版と同じ。〕」(К. Маркс и Ф. Энгельс Сочинения ТОМ 23, 1960, СТР. 138.)

現行版のこの個所の一文、「紙券の量が、たとえば1オンスずつの金の代わりに2オンスずつの金を表示するとすれば („Stellt die Papierzettelmasse z. B. je 2 Unzen Gold statt je 1 Unze dar,“)」の意味は、理解しがたい。ロシア語訳はこれを苦心して訳文のような意味に解したもので、この意味でなら原文も理解されうるが、マルクスの真意ははたしてそうであったか、どうか、原文に即するかぎり、疑問とされる。ロワ訳での変更は、マルクスのこの点についての反省によると思われる

が、どうであろうか。英訳がロウ訳にもとづいて訂正されていることは、いうまでもない。しばしばロウ訳による訂正を加えているカウツキー版は、この個所について訂正していない。カウツキー版の訳者、岡林辰男氏の訳注参照（『対訳・註解 資本論』第2分冊、白揚社、1936年、訳註p. 43参照）。氏は現行本文中の 2 Unzen Gold を $\frac{1}{2}$ Unze Gold の誤りではないかともべている。

36. D. S. 142. ②. Z. 1—4. 訳. P. 167.

「紙幣の諸商品価値にたいする関係は、ただ、紙幣によって象徴的感覚的に表示されているのと同じ金の諸量 [Goldquantis. 初版 (S. 89), 第2版 (S. 109) = Goldquanta. カウツキー版 (S. 86)] = Goldmengen で諸商品価値が観念的に表現されているということにあるだけである。」

F. P. 53. I. ③. L. 2—6.

「紙幣と諸商品との間に存する関係は、全く簡単につきの点にある。すなわち観念的に諸商品の諸価格で表わされているのと同じ金の諸量が紙幣によって象徴的に表わされているということである。」

37. D. S. 143. ①. Z. 3—12. 訳. PP. 168—9.

「それ [紙幣によって代理されうる最小量の金] は、つねに流通部面に住んでいて、ひきつづき流通手段として機能し、したがってただこの機能の担い手としてのみ実存する。だから、その運動は、ただ商品変態 $W-G-W$ の相対立する諸過程の継続的な相互変換を表わしているだけであり、これらの過程では商品にたいしてその価値姿態が相対したかと思えばそれはまたすぐに消えてしまうのである。商品の交換価値の自立的表示は、ここではただ瞬間的な契機でしかない。それは、またすぐに他の商品にとって代わられる。それだから、貨幣を絶えず一つの手から別の手に遠ざけて行く過程では、貨幣の単に象徴的な実存でも十分なのである。」

F. P. 53. II. ①. L. 2—11.

「この総量はつねに流通領域に属し、絶えず流通要具として機能し、もっぱらこの機能を支えるものとして存在する。こうしてその通流は $M-A-M$ [商品—貨幣—商品] という変態の相対立する運動の継続的交替を表わしているだけであり、その変態では諸商品の価値姿態が諸商品に相対するがすぐ後に消えてなくなるし、またそこでは一商品の他商品による代置は絶えず一方の手から他方の手へ貨幣をすべりこまさせるのである。」

38. D. S. 143. ①. Z. 17—22. 訳. P. 169.

「ただ、一つの共同体の境界によって画された、または国内の流通部面のなかだけで貨幣はまったく流通手段または铸貨としてのその機能に解消してしまうのであり、したがってまた、紙幣において、その金属実体から外的に分離された、ただ単に機能的な存在様式を受け取ることができるのである。」

F. P. 53. II. ①. L. 18—22.

「この国家の強制行為は、流通の国民的範囲においてのみおこなわれるが、同様にそこだけで貨幣が铸貨として果たす機能が孤立しうるのである。」

39. D. S. 143. Fußnote. 85. Z. 6—7. 訳. P. 169.

「人々が取引のさい注意を払うのは、貨幣の名称と通用〔Kurs. 初版(S. 90)のこのバーボンの引用文は英語の原文ではあって、これは currency とある。第2版(S. 110)も同じ。カウツキー版(S. 87)ではこの語がPrägung(刻印)とある。〕とであって、銀の数量〔Menge. 初版、第2版=quantity. カウツキー版=Gehalt.(純分)なおカウツキー版ではこの引用文の独訳が現行版のそれと異なっている点が以上の他にもある。〕ではない。

F. P. 53. II. note 1. L. 9—11.

「人々が取引で注意を払うのは、貨幣の名称と通用とであって、その銀の質〔sa qualité d'argent. Gallimard版(P. 671)および Éditions Sociales版(P. 135)では、la quantité d'argent(銀の量)とある。〕ではない。」

(付注) ロワ訳文の qualité は quantitéの誤記または誤植であり、他の二つのフランス語版での訂正は正しいと思われる。Garnier-Flammarion版(P. 597 note 36)は、ロワ訳と同じである。ちなみにこの引用文をふくむバーボンの著書での出所を示したページ数が、現行版および初版、第2版では、29, 30, 25 とあるが、カウツキー版では 29, 30, 45 とあり、ロワ訳でもそうある。Éditions Sociales版では、「マルクス・エンゲルス・レーニン 研究所版に従って訂正した」という編注を付して現行版通りになっている。Gallimard版も同じ。Garnier-Flammarion版ではロワ訳通り。英訳(P. 129)では現行版と同じ。

なお第3章第2節中で段落(改行)について両版の相異(いずれも現行版で改行されていない個所にフランス語版では改行されているもの)を一括示すると、つぎの如くである。

1. D. S. 120. ①. Z. 7. „Der Austauschprozess. . . “ (訳. P. 140) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 44. I. ③.

2. D. S. 120. ⑤. Z. 1. „Das Über springen. . . “ (訳. P. 141) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 44. II. ④.

3. D. S. 123. ①. Z. 6. „Die Reacisiorung. . . “ (訳. P. 144) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 45. I. ⑥. —II. ①.

4. D. S. 123. ②. Z. 11. „Aber. . . “ (訳. P. 144) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 45. II. ③.

5. D. S. 124. ①. Z. 6. „Wir. . . “ (訳. P. 145) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 45. II. ④.

6. D. S. 125. ①. Z. 1. „G—W. . . “ (訳. P. 146) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 46.

I. ④.

7. D. S. 125. ①. Z. 3. „Da. . . “ (訳. P. 146) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 46. I. ⑤.

8. D. S. 126. ①. Z. 3. „Allerdings. . . “ (訳. P. 147) で、ロワ訳では改行してある。F. P.

46. II. ③. →前出項目 15。

9. D. S. 126. ②. Z. 2. „Dieselbe Ware. . . “ (訳. P. 148) で、ロワ訳では改行してある。

F. P. 46. II. ⑥.

10. D. S. 126. ③. Z. 7—8. „Die Ware. . . “ (訳. P. 148) で、ロワ訳では改行してある。F.

P. 47. I. ②.

11. D. S. 127. ②. Z. 20. „Die Zirkulation. . . “ (訳. P. 150) で、ロワ訳では改行してある。

F. P. 47. II. ②. →前出項目 17。

12. D. S. 129. ②. Z. 7. „Dajz. . . “ (訳. P. 152) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 48. I.

③.

13. D. S. 131. ②. Z. 21. „Ganz. . . “ (訳. P. 154) で、ロワ訳では改行してある。但し最初の9行分が欠けており„Man. . . “で開始している。→前出項目24。

14. D. S. 133. ①. Z. 12. „Dieser. . . “ (訳. P. 156) で、ロワ訳では改行してある。F. P.

49. II. ②. →前出項目26。

15. D. S. 134. ①. Z. 3. „Die Geldmasse. . . “ (訳. P. 157) で、ロワ訳では改行してある。

F. P. 49. II. ⑤. →前出項目28。

16. S. 140. ②. Z. 4. „Das Münzdasein. . . “ (訳. P. 165) で、ロワ訳では改行してある。

F. P. 52. II. ②. →前出項目33。

17. D. S. 142. ①. Z. 6. „Alles . . . “ (訳. P. 167) で、ロワ訳では改行してある。F. P. 53.

I. ②. →前出項目35。